KANAGAWA UNIVERSITY Magazine

PROUD BLUE

08

2021/03

FEATURE | pp.02-15

髙井 典子 教授
国際日本学部 国際文化交流学科
観光学

周 星 教授
国際日本学部 歴史民俗学科
東アジア民俗学

藤澤 茜 准教授
国際日本学部 日本文化学科
美術史、日本文学

髙城 玲 教授
経営学部 国際経営学科
文化人類学、
東南アジア（タイ）研究

松浦 智子 准教授
外国語学部 中国語学科
中国古典文学、中国通俗文学

西谷 和彦 教授
理学部 生物科学科
植物生理学、植物細胞壁生物学

江上 正 教授
工学部 機械工学科
知能機械学・制御システム、航空宇宙工学

LABS | p.16 工学研究所

A NEW HOPE | p.17

小野寺 佑紀 博士後期課程3年
歴史民俗資料学研究科

INTERVIEW: HISTORY INSIGHTS | pp.18-19

後藤 政子 名誉教授
ラテンアメリカ現代史

TREASURE | p.20 アチック写真

FEATURE

観光をとおして社会と人を見つめる

観光学という新しい学問。
それは単なる旅行業の研究でも
移動の快適さをめぐる研究でもなく
どうやら奥深い人間学のようなのだ。

高井 典子教授

国際日本学部
国際文化交流学科

観光学

「観光」は産業革命が生み出した

観光学――それはいったい、どんな学問なのだろう。

「旅」は大昔からあった。だが、「観光」という現象は近代化とともに現れたと髙井は言う。

「産業革命によって労働と余暇が区別されていきました。都市生活者、工場労働者のいわば時空が変化し、彼らにとって余暇というものが初めて生まれたんです。そこに資本主義の論理が入っていき、余暇が経済の対象となり、観光という産業が生まれました。旅人は消費者となり、観光客となったわけです」

1840年代に創業したイギリスのトーマス・クック社が、現代の旅行産業の出発点とされる。彼らはガイドブックをつくり、顧客の旅程を組み、トラベラーズチェックを発行するなど、旅を商品化していった。

「もともと旅は危険なものと見なされていました。ところが産業化されることによって旅は誰でも行けるものとなりました。19世紀にヨーロッパの婦人が海外旅行をするというのは、とてもすごいことだったんです。そうやって産業化が旅を大衆化し、やがて第二次世界大戦後、本格的なマスツーリズムの時代がやってきました。大量に送客して、いかに大きな利益を出すかが求められ、旅はどれも似たようなものになっていったのです。山奥に行ってもマグロが夕食に出てきたり（笑）」

それに対抗するものとして登場したのがバックパッカーたちで、彼らは観光産業の外部に出ようとした。日本では小田実や沢木耕太郎といった作家やジャーナリストたちがその象徴だ。そんなふうに、時代を映し出す鏡の一つとして観光があると髙井はこう言う。

「観光学と聞くと、旅行業をどううまく経営するかとか、地域にどうやってお客様にきてもらうかとか、そういうことを研究する学問だと思うかもしれません。そういう面ももちろんあるのですが、わたしにとっての観光学とは、近代以降の社会を見るための視角なんです。マスツーリズムがやってきたあとの世界では、だれもが観光客になり得るのですから」

他者にとっての世界を垣間見る

もちろん、観光学はそれだけではない。

「一昔前なら海外旅行は一生に一度の旅。ところが、いまではコモディティ化して誰でもできるものになっています。それはそれでいいことですが、ただ消費するだけの旅になってしまいがちです。一方では旅によって人生が変わることもあります。日常では出会うことのない風景、人々、食べもの、匂いや湿度。そして、日常では湧き上がることのない類の感情。そんな経験が積み重なっていくうちに、その人に変化をもたらすことがあります」

とはいえ、人生を変える旅だけが正しい旅という考えは窮屈すぎると髙井は言う。旅においては何があってもいいと。「自分だけが変わるのではなく、他者もまた変わる」とい

Noriko Takai

1987年、同志社大学法学部卒業。1996年、英国サリー大学修士課程修了。英国暁星国際大学専任講師、国際大学大学院国際経営学研究科専任講師を経て、2007年、英国レディング大学博士課程修了。2010年、文教大学国際学部准教授。2016年、文教大学国際学部及び大学院教授。2020年、神奈川大学国際日本学部教授。

イギリス留学中、エジプトはルクソールに旅をし、疲れ果てて地べたに座り込んでいた時に友人が望遠レンズで撮影したもの。初めてのアラブでカルチャーショックを受けたという。

10年すごしたイギリスでも常に旅をした。自分の人生を変えたというコッツウォルズには、つごう50回は訪れたという。

う視点に立てば、観光の別の大きな意味が見えてくると言うのだ。

「観光とは、自分と異なる他者、共有するものが何もないような他者と相対する直接的な体験とも言えます。その時、観光客と観光客を受け入れる側が影響を与え合い、互いが変わるということが起きるかもしれません。思想や考え方で分断されている現代は、急激な変化に対して脆弱な停滞した社会だとも言えます。だから、互いが痛みを伴いながらも変容する社会でないと、世界は閉塞感で息詰まってしまうのではないでしょうか。世界をしなやかで受容的なものにしていく観光の可能性をどうやって引き出して実装していくか、マスツーリズムを経た今だからこそ考えたいと思うんです」

英語の「共感（empathy）」には、他者の立場から見た時に世界がどう見えるのかを想像する能力という意味があるという。損得勘定なしの想像力はやがて他者を受容する寛容な態度を育むのではないか、そんな「共感」を引き出す可能性を観光は内包するのではないかと髙井は考える。

「留学や駐在など海外での生活は誰もが経験できるとは限りませんが、観光は多くの人に開かれています。たとえ消費としての観光であっても、自分が考えてみることもなかった世界を直接体験し、この人たちから見た世界はこんなふうなのかと気づかせる力がそこにはあるのではないかと思うんです」

街で困っている外国人旅行者を手伝う活動を続ける、若者たちの NPOへの参与観察を髙井は続けている。これは「ホスト／ゲストの役割流動化」という研究の一環だ。現代ではだれもが観光の場面においてホストでありゲストでありうる。そんな場面において、「共感」の視点を人はどんなふうにして持ちうるのだろうかということを探るのである。

「国と国の関係を越えて個人と個人が相対する場の積み重ねに注目することで、観光が持つ社会的意味が切り出されてくるかと。現地の人の視点を借りてみると、世界や日本がそれまでとは異なる姿を見せて迫ってくる、わたし自身もそんな経験に目を開かされました」

その「現地」とはイギリスのことである。

人生を変えた短い一人旅とは

髙井自身、一つの長い旅と、一つの短い旅に人生を変えられたという。長い旅とは、挑戦と挫折の連続であった足かけ10年に及ぶイギリス生活（留学と就労）である。

「３歳の頃から、お菓子を包んだ風呂敷を背負って『旅に出ます』と言ってどっかに行ってしまうって、母がよく言っていました。小学生になると自転車に乗って校区外の探検にしょっちゅう出かけてたし、テレビの『世界の子どもたち』という番組が大好きで必ず見ていました。ずっと旅に憧れていたんです。でも、大学を卒業する時には旅行業界ではなく、商社を就職先に選んだんですね」

ところが、クルーズ船の仕事に関わったことがきっかけで、海外で観光を学びたいという思いが抑えられなくなった。抽選で１カ月の授業料無料というロンドンの語学学校のキャンペーンに応募すると当選、イギリスへと旅立つ。勉強は１カ月では足らず、４カ月に延ばし、週末にはクラスメートたちと各地を旅してまわった。そのうちの一つの短い旅が髙井を研究者へと導いた。そこはイングランドの丘陵地帯にあるコッツウォルズという、中世の面影を残す美しい景観の村々だった。

「ライム色の石の建物が並ぶ『蜂蜜色の村』と呼ばれているところです。一人で行ったんですが、友人たちと一緒にいる時とは、見えるものすべてが違って見えたんです。とても強い感情に揺さぶられたわたしは、必ずまたここに帰って来ようと思っていました」

コッツウォルズでの体験は、旅は人生を変え得るという直感を髙井にもたらした。そして自分が観光という営みにいかに魅せられているかを思い知らせた。同時に、観光客としての自分と産業が入れ子状になっているのが観光の構造でありながら、それでも自由は自分の内側にあるんだと感じた。

「コッツウォルズに行かなかったら、たぶん、今の仕事はしていなかったでしょうね」

観光学――それは新しい人間学なのかもしれない。

FEATURE

ボーダーラインをたえず越境する学者であること

文化大革命、そして鄧小平時代の改革開放。
怒濤の中国から日本に研究拠点を移しておよそ20年。
国境の壁を越えた東アジア民俗学の構築を目指して
奮闘を続ける周の根底には平和への願いがある。

周 星 教授

国際日本学部　歴史民俗学科

東アジア民俗学

普遍性のある価値を見出したい

周は「越境する学者でありたい」と言う。越境するボーダーは日本と中国の国境であり、人類学と民俗学という学問の垣根である。

「“越境する”とは、普遍性を求めて、常に未知の世界に好奇心を持ってチャレンジし続けていくことです。学問の既存の枠に縛られることによる偏りを自分は持っていないか、常に自己懐疑的な態度をもつことが学者には必要だと思います。それがまた人間としての成長にもつながるのではないでしょうか。そのためにも“越境する”ことが大事なのです」

中国から日本へと研究者としての拠点を移しておよそ20年。文字通り自ら国境を越え、跨ぎつつ、日中韓の民俗文化の比較研究をベースとした、東アジア民俗学という“越境する”カテゴリーの構築を周は目指す。

「わたしたちは、学問において民との関係性を常に頭の中におくべきです。民との関係とは、実用だけではなく、国民の幸福、人間の幸福を第一に考えるということにほかなりません。現実世界には壁があり、他者不信もあるでしょう。東アジア三国には冷戦時代に残してきた問題もあります。それを乗り越え、民間の学問の世界から、一学者として、一市民として、普遍性のある価値を見出したいと考えているのです」

文革時代、そして改革開放へ

周の「越境」への情熱は、第二次世界大戦後の新中国の怒濤のような歴史とともに歩んだ半生そのものともいえる。

1957年、中国・陝西省丹鳳県に生まれた周は、小学生の頃に文化大革命を経験する。

「学校に通ってはいましたが、テキストをもらって勉強をした記憶がありません。子どもたちは皆まともな教育を受けられなかったんです。都市と農村の経済格差も深刻で、夏休みや冬休みに田舎の祖母の家に行くたびに農民たちの苦労を目にしました」

高校を卒業すると上山下郷運動によって周は農村へ下放され、３年間を農民として働いた。「楽しかったという思い出はほとんどありません」と周は振り返る。

鄧小平の時代となり、改革開放が始まると大学が再開される。周は農村から受験し、1978年に西安の西北大学に入学、歴史学部で考古学の勉強を始める。

「まだまだ生活は厳しかったですが、イデオロギーの束縛から解き放たれ、世界が生き生きとしていました。蔵書の数は少なかったですが、毎日、図書館で本を読みふけりました」

日本との最初の縁が生まれたのはこのときのこと。考古学を学ぶにあたって第一外国語として指定されたのが日本語だったのである。

大学の４年間が終わる頃には周青年の学問への情熱はさらに高まり、大学院にあたる北京の中国社会科学院歴史研究所に進学する。

Zhou Xing

神奈川大学国際日本学部 歴史民俗学科教授。1957年、中華人民共和国陝西省に生まれる。1981年、中国西北大学歴史学部卒業。1989年、中国社会科学院大学院（中国社会科学院研究生院）人類学研究科（民族系）民族学専攻修了。 1993〜2000年、北京大学助教授・教授。2000年、愛知大学国際コミュニケーション学部教授。2020年、神奈川大学国際日本学部教授。

研究者、周星の誕生である。

「先史学、つまり文字ができる前の中国の歴史を復元するというのが当時のわたしの夢でした。甲骨文字が生まれる前の文明とはどんなものだったのか、その謎に迫りたかったのです。少数民族社会の調査とともに、考古学資料、文献資料とを合わせて中国古代を復元しようと思ったのです」

何千年も前、半穴居生活を送られた黄河流域の「原始人」と雲南の少数民族などの調査研究を続け、周は修士論文にまとめあげる。

日本にいることで見えること

その後、周は民族研究所にて博士課程を送り、指導教授となった「マルセル・モースやレヴィ＝ストロースといった構造主義的人類学の中国での代表者の一人である楊堃先生」のもとで研究を続けた。卒業後は同所に研究者として勤める。周曰く、「堅苦しいイデオロギーにチャレンジして、国際社会を意識した研究を続けました」。やがて、周の名は斯界に少しずつ知られていく。

転機となったのは北京大学でのポスドクとしての勤務だった。指導教授は中国を代表する社会人類学者の費孝通先生である。「先生はイギリス留学の経験があり、柳田國男先生に近い理想、つまり経世済民――学問は世の中のためにあるという考えを抱いており、わたしはそれに強い感銘を受けました」

そして日本との第二の縁が生まれる。科研に参加するチャンスにめぐまれ、1992年から1年間、日本に留学、外国人特別研究員として働いたのである。帰国後、周は日本での経験から、中国の学問のレベルアップのためには、外から中国を見る視線・視野が必要であることを痛感するようになる。北京大学で教授のポストへと昇進したにもかかわらず、閉塞感を覚えた周は、もう一度日本で研究をしたいと願い始める。そして2000年、ついに願いが叶う。愛知大学に教授として招聘されたのである。

「当初は2、3年で戻るつもりでしたが、日本にいると中国にいては見えなかったことがはっきりと見えることに改めて気づき、日本を拠点として中国と日本を行ったり来たりする、つまり“越境する学者”を選択することにしたのです。日本にいながら中国の学問世界に貢献する道があると思ったのですね。そしてあっという間に20年が過ぎました」

周の著書の中でも代表的な3冊。中央の著書『道在屎溺：当代中国的厠所革命』(2019) は中国のトイレ革命について書いたもの。

それぞれにそれぞれの美がある

2020年より周は神奈川大学国際日本学部で教鞭を執る。

「日本の民俗学の中心といえる神奈川大学で勉強をして、自分の学問をレベルアップさせたいと思っています。いまは東アジア民俗学――すなわち、越境する民俗学のあり方、その可能性を追究しはじめたところで、自国の民俗学ではなく、枠を越えた人類学、人間社会の普遍性を追い求める学問のあり方を探していきたいのですね」

学問は一国で自己完結するのではなく、普遍的なものが目指されるべきだと周は考える。そのためにも、日本と中国が協力し合い、努力しなければいけないと言う。

「お互いに相手の国の人間性を認め合うことがとても大事です。北京大学のわたしの恩師がこんなことを教えてくれました。『おのれの国の人も美しい。となりの国の文化も美しい。それぞれにそれぞれの美がある。だからみんなが美しい。そして天下は平和だ』と。相互信頼、相互確認を、学者たちがまず行わないといけません。難しいですが、その方向性は間違いではないと思います」

そしてその鍵は“越境”にあると。なぜなら、ラインを乗り越え、越境することで、今まで見えなかったことが見えてくるから、気がつかなかったことに気づくから。そう、周は言うのだ。

橋について論じた著書『境界与象徴：橋和民俗』(1998) の口絵。

FEATURE

歌舞伎の美と浮世絵の美と江戸の人々

江戸時代に花開いた歌舞伎と浮世絵。
両者に通底する独自の美意識と庶民のためのメディアとしての役割。
二つの芸術の尽きぬ謎に時を超えて挑む。

藤澤 茜 准教授

国際日本学部
日本文化学科

美術史、日本文学

Akane Fujisawa

1998年、学習院大学人文科学研究科博士後期課程修了。博士（日本語日本文学）。2020年4月、神奈川大学国際日本学部日本文化学科准教授。著書は『浮世絵が創った江戸文化』（笠間書院）、『藤間家所蔵浮世絵全覧』（公孫樹舎）など。

メディアミックスとしての歌舞伎と浮世絵

「江戸時代に行きたいなあとは年中思いますね。さまざまなものごとを楽しむ感性に優れていた時代だったのではないでしょうか」

浮世絵と歌舞伎を主軸として江戸文化史の研究を続ける藤澤。タイムトラベルをしてみたいと願う江戸の文化とはこうだったと言う。

「歌舞伎も江戸時代では“現代劇”ですので、舞台の上では当時売りはじめた薬などの商品がちらりと宣伝で出てきたり、役者が流行りのファッションで登場したりと、情報や知識が得られる場所でもありました。また当時人気の小説が歌舞伎になって上演されたり、それがこんどは浮世絵になったり、今で言う人気小説の舞台化や漫画化みたいなものも盛んでした。たとえば『南総里見八犬伝』は読本という少し難しい小説に属しているのですが、これが人気が出ると歌舞伎になり、絵と文字が一体化した草双紙という小説になり、このキャラクターはこの歌舞伎役者に演じてほしいという願望を表現した浮世絵も出てきます。江戸時代中期には、個々の役者を似顔で描く手法が定着しましたので、個々の役者を顔だけで判別することができました。『八犬伝』中の美男の信乃という役を八代目團十郎の顔で描いている浮世絵があるのですが、これは信乃は團十郎にやらせたいという架空の絵なんですね。『八犬伝』は双六にもなっていますし、現代のメディアミックスのように、一つの小説からいろいろなものが派生していく。江戸時代の人の発想力はすごいなと思います」

江戸は18世紀はじめには人口100万人をかかえる世界有数の大都市だった。商品経済も発達し、娯楽に限らずさまざまなものがシステム化されていたと藤澤は言う。浮世絵にしても版元という出版社があり、そこがプロデュースから販売、流通までおこなっていたからこそ、多くの作品が生まれ、人気が出たのだ。

歌舞伎は浮世絵のように綺麗でなくては

藤澤の江戸への関心は祖母の歌舞伎好きによる。

「中学生の頃から祖母に連れられて歌舞伎をよく観に行っていました。お芝居の筋は分かりにくかったのですが、劇場という空間で生のお芝居を観るという体験自体がとても面白かったんですね。大学生になってからは一人で行きました。坂東玉三郎さんや片岡仁左衛門さんが大好きでしたね」

大学では歌舞伎の講義もあり、趣味の世界だとばかり思っていた歌舞伎が学問になっていることに驚く。4年になると歌舞伎を真剣に学びたいと考えはじめ、卒論のテーマを歌舞伎にすると決めた。浮世絵を意識しはじめたのもこの頃からだ。

「歌舞伎の研究といっても、わたしは現代のではなく江戸時代の歌舞伎について知りたいと思っていたので、それならば役者が描かれている浮世絵を資料としてきちんと見ないとだめだと恩師に言われたんです」

やがて浮世絵と歌舞伎の意外な関係をいくつも発見する。

「お芝居が上演されたあとに役者の絵が出るというのが普通の流れなのですが、上演されるより前に役者の絵が作られている例もけっこうあるんです。それぞれの役者には大勢のファンがついていましたから、その人たちに向けた宣伝のような役割を役者絵が果たしていたんですね。劇場側にとっても嬉しいですし、版元も他の版元との競争に勝つためには早く売り出したかったのでしょう。庶民にとって役者絵はお芝居の情報源ですし、その絵を元におしゃべりに花を咲かせたりもした。そんなことを考えると楽しくて」

歌舞伎と浮世絵の双方に通底する美意識もその一つだ。

「明治以降の劇評に『この芝居は浮世絵らしさがないから駄目だ』ということが述べられています。つまり、歌舞伎には浮世絵の持つ江戸時代らしい雰囲気が必要であり、浮世絵のように綺麗でないといけないという感覚があった。浮世絵らしい舞台を作るという感覚は実に独特ですね」

それは役者の所作にも通じると、藤澤はこんなエピソードを披露してくれた。

「市川猿之助さんの講演会の司会をつとめる機会があり、浮世絵の役者のポーズは絵師が誇張して描いているんですよねと何気なくうかがったら、そう見えるかもしれないが、実は役者の目から見ても役者絵のポーズは理にかなっているとおっしゃったんです」

猿之助丈いわく、演技の稽古では役者絵に描かれているような無理なポーズをさせられることもあり、それは舞台の上で強く美しく見せるためのポーズだと教わるというのである。役者の動きがどれほど絵の中に反映され、表現されているのか、証明するのは今となっては難しいが、そういうところまでも突き詰めていきたいと藤澤は考える。

「役者絵は江戸時代の舞台全体の雰囲気をそこに込めて描かれていたであろうし、見る人はそれを楽しんだと思うのです」

大スター八代目團十郎の死絵とは

天保の改革など、幕府によって役者絵の出版が禁止された時も、役者絵だとばれないよう役者の名を記載せずに似顔絵だけで勝負するなど、絵師たちは規制の網を賢くかいくぐる。幕府の規制下でも歌舞伎や浮世絵などの文化を守り発達させていった当時の庶民のしたたかさには驚くと藤澤は言う。

美術史的、演劇史的な研究にとどまらない広がりを目指す藤澤は、浮世絵の社会的役割、そのメディア性に強く引かれる。そんな藤澤が好み、注目するものの一つが死絵（しにえ）である。

「役者が亡くなった時にそれを絵で伝えるのが死絵です。お釈迦様の涅槃図のように役者の遺骸のまわりで女性たちが悲しんでいたりとか、極楽に行ってちゃんと成仏している様子であったり、絵柄はいろいろですが、亡くなった役者への悲しみの感情や、生前の功績を讃える気持ちを込めて描かれたものがたくさんあります。当時の役者が江戸の人々にとっていかに特別なスターだったかがわかります」

その死絵が最も数多く出版された役者が八代目團十郎だった。

「江戸の役者だった八代目團十郎は当時の大スターで女性ファンがとても多かったのですが、大阪に行っている時に自殺をしてしまったんです。それはもうセンセーショナルな出来事でした。人気絶頂で亡くなりましたので、人々のショックはとても大きかったんです」

西洋には油彩などで描かれたシェークスピア俳優の肖像画なども残っている。だが、それらは江戸の役者絵とどんなにかかけ離れていることだろうかと藤澤は思う。役者絵には実際の舞台の生命が宿っている。そしてなによりも、上流階級に属する芸術ではなく、歌舞伎という演劇芸術を含めて庶民のものであった。その独自性に藤澤は強く心を動かされるのだ。

「一番好きな絵師は歌川国貞ですね。役者絵や美人画を得意として、浮世絵師で最多とされる作画量を誇る絵師ですが、現在の知名度がそれほどでもないんですよ。なんとか多くの人に知ってもらいたくて、授業でも学生によく話すんですが」

そう言って笑う、その時代を知り尽くしているかのような表情の藤澤は、実はすでに江戸時代へとタイムトラベルしたことがあるのかもしれない……。

三代歌川豊国（歌川国貞）が描いた八代目團十郎の死絵。八代目團十郎については、さまざまな絵柄の死絵が多数描かれた。（所蔵：藤澤茜）

著書の『浮世絵が創った江戸文化』（笠間書院）と、監修をした『浮世絵』（京都芸術大学の所蔵品カタログ）。

FEATURE

タイが文化人類学者に教えてくれたこと

きっかけはタイの言葉だった。
やがてタイに魅せられ
若き文化人類学者として
フィールドワークに赴く。
そこでタイが教えてくれたこととは……。

高城 玲 教授

経営学部　国際経営学科

文化人類学、
東南アジア（タイ）研究

文化人類学の対象は「未開」の地だけではない

文化人類学と聞けば、どこか遠く「未開」の地に赴いて調査研究をし、民族誌を書き上げるといったイメージを多くの人が抱くのではないだろうか。だが、髙城によれば、そのイメージは大きく変化していると、こう語る。

「最先端の現代技術と人間との関係も人類学の対象になりえます。グローバル化やネオリベラリズムなど、現代社会に特徴的な政治や経済を対象とした人類学も注目を集めています。『未開』社会であろうと、現代社会であろうと、人間と社会とモノがどのように関係しているのかについて、いろいろな分野を関連付けながら、具体的な対象に接する現場から、考えていく。そういう広いパースペクティブの中で経験的に探求を深めることが人類学の魅力だと思います」

文献などの資料だけではなく、現場（フィールド）で見たこと、感じたことも根拠となるデータとして使っていく。そうやってできあがったものは、個の経験的視点を通した多面的、重層的な重要性を持つと髙城は言う。

そんな髙城にとっての「現場（フィールド）」とは、主に東南アジアのタイであり、その出会いは東京外語大の学生時代にさかのぼる。

「ちょうどバブル期のころで、東南アジアに日本企業が多く進出していたことから、タイ語を勉強すれば就職に有利だろうという、『よこしま』な理由もあってタイ語を選んだんです」と髙城は笑う。ところが春休みに友人とタイに旅をしたことが、髙城の「よこしま」な気持ちを大きく変えた。

「新鮮でした。特に日本の田舎育ちの私にとって、世界が一気に広がりました。タイの言葉だけでなく、文化や政治経済も学びたいと思うようになり、やがて研究の世界に入ろうと無謀にも考えるようになったんです」

指導教官が厳しかったせいか、ゼミの学生は実質、髙城一人だったという。

「論文をちょっと粗く翻訳して提出したら、先生に『きみはこの著者をバカにしているのか。彼らは自らを賭けて、これだけのことを書いているのだ』と突っ返されたことがありました。そこで言われたのは、タイを鏡として自分を見るのだと。タイを軸として、そこから自分を立ち上げるのだということでした」

言いかえれば、タイを研究することは、自分自身を知ることにつながっていくのだと。髙城は、そんな環境の中で、タイにどんどん魅せられていった。

忘れられないタイでのフィールドワーク

初めての長期のフィールドワークは大学院の博士課程、二十代半ばのとき。文科省のアジア諸国等派遣留学生としてチェンマイ大学の社会研究所に籍を置くかたちで、チェンマイとバンコクの中間に位置するナコンサワン県の小さな村に暮らし、2年を費やした。

タイの人類学といえば山地の少数民族を対象にする研究者も多かったが、髙城が調査地

Ryo Takagi

宮城県生まれ。東京外国語大学卒業後、2000年、総合研究大学院大学博士後期課程単位取得退学。博士（文学）。2006年、国立民族学博物館機関研究員。2007年、神奈川大学経営学部助教。准教授を経て、2016年より神奈川大学経営学部教授。

に選んだのは平地にある普通の小さな農村である。髙城は村の日常のさまざまな行為や儀礼の中から、いかにして権力の構造、力の秩序が生まれていくのかを、現場からこまやかに描き出そうとしたのだった。

「当時は、非合法な蓄財なども介して地方の有力者が政治家となり、国政にも入っていくということが起きていました。そのようなことがいかにして生じるのか、以前から関心を持って調べていました。そのため、実際にタイの農村で、日々のどういう行為によって、ある人物が他の人と差異化されて権力が生まれていくのか細かく描こうと考えたんです」

タイに入ってからは、まず1カ月ほどかけて多くの村々を回り、どの村を対象にするかを調べた。最終的に一つの村を選び、拠点となる現地の家庭を見つけ出す。

「いわば居候としてお世話になるわけですが、朝昼晩の食事にフルーツ、おやつまでいただいて、しかも食事は私の口にとても合ったので、人生でMAXの体重になりました」と髙城は笑うが、もちろん、日々のフィールドワークはときに苛酷であり、「疲れ切ってしまって、不安を感じる余裕もない時期もあった」という。

調査はまず詳細な村の地図作りから始まり、村の現状を調べ上げる。さらに、経験したこともない農作業を手伝ったり、儀礼があれば参加するなど、村に溶け込むことに2〜3カ月をかけた。そして村人の信頼を得てはじめて、専門的な調査がはじまる。髙城は自分のことを話し下手で、コミュニケーションに苦手意識があるというが、それでも共に過ごす時間をかけることで多くの人から話が聞けた。選挙運動期間中の饗応などの実態も詳細に記録した。

「できる限り多くの場所に身を置いて、ビデオカメラでもこまかく撮影して記録しました。ビデオ映像から誰がどういう発話や行為をしたのか、演劇の台本のように書き出して、そこから分析を重ねていったんです」

秩序や権力は細部に宿る

髙城は「ミクロロジー」という言葉を著書のタイトルに使った。辞書での意味は「ミクロ生態学、ミクロ分析」であるが、髙城は「秩序や権力は細部に宿る」という視点の謂いとして用い、こんな一例をあげる。

「私がいたタイの村の村長はいつもズボンのベルトにトランシーバーをはさんでいて、歩きながらそれで連絡を取っていました。村人にとっては、トランシーバーを耳に当てている人がいたらそれは村長だという認識が生まれる。つまり、トランシーバーという、いわばミクロなモノを介したささいな行為によってある人物が差異化され、権力が顕在化されるようになるんです」

ミクロな日常の行為が社会を創り出していく。その都度のメカニズムを記述し明らかにするのが髙城の主眼であり、それがミクロロジーなのだ。

神奈川大学に赴任後も、タイを中心に調査地を拡げながら、「行為と権力」を主たる問題対象として多彩な調査研究を続ける。この数年は、タイの不安定な政治状況のもと、農村部がこの政治的分断をどのように生きているのかを、現地に入りながら、地方からの視点で見ていくことに力を注いでいる。

「タイ北部のチェンマイでは、辺境の農村にもさまざまなコミュニティラジオ局が開設され、それらが政治的な立場を持って活動を行ってきました。こうしたラジオ局には一般の住民や農民たちも多く関わっています。ラジオ局に集まる人々が、ラジオの声を介して、分断の中でどのようにコミュニティの運動を創り出していくのか、その有り様を地方末端の村を中心として具体的に描いていきたい。現代の混沌とする政治・社会を下方の現場からも見返していくということをしたいんです」

現場にこだわる研究者としてのいまの自分があるのは、タイでのあの2年間のフィールドワークのおかげだと髙城はいう。

「日本にいたままだったら気づかなかっただろう、世界にはまったく違う生活があり、まったく違う視点がありえるのだということを身をもって知ることができました。自分のいる世界が唯一無二の正しい世界じゃないんだということを」

その2年間を髙城が「かけがえのない思い出」と呼ぶ理由がここにある。

髙城のフィールドノート。ビデオを回せず、メモも取れないときは帰宅後、「居候」先の蚊帳の中でひたすら記憶をたどってフィールドノートに書きとめていったという。

髙城の著書『秩序のミクロロジー——タイ農村における相互行為の民族誌』

FEATURE

中国通俗文学という名のサブカルに魅せられて

日本でも多くの読者を持つ『三国志』や『水滸伝』。
明代に多く出版されたそんな通俗文学に隠された
当時の人々の声なき声を松浦は丹念に拾い続ける。
“ものがたり”は常に人を揺り動かす力を備えていたのだから、と。

松浦 智子
准教授
外国語学部 中国語学科
中国古典文学、
中国通俗文学

Satoko Matsuura
神奈川大学外国語学部中国語学科准教授。1978年、東京生まれ。2001年、早稲田大学文学部卒業。2013年、名城大学理工学部助教。2019年、神奈川大学外国語学部准教授。

社会への大きな影響力を持つサブカル

研究室の書棚にズラリと並ぶ『キングダム』の単行本。秦の始皇帝と将軍・李信を描くこの大人気劇画を松浦は気軽に学生に貸し出す。「マンガはめちゃくちゃ好きですね（笑）。映画も小説も好きです。“ものがたり”というものがないと生きていけない人間なんです」

松浦の研究テーマは宋・元・明・清の中国通俗文学だ。それはその時代の中国に生きた、松浦と同じように“ものがたり”の存在なくしてはいられなかった無名の人々の心そのものでもある。だからなのか、松浦は自身の扱うテーマを表すのに、より広く現代的な「サブカル」という用語を使う。

「勉強に近い文学よりは勉強から少し遠い文学、硬めよりはやわらかめの文学ということですが、それを望む人がいたからこそ、それが出てきた。存在するものには存在するだけの理由、意味があるのですね。サブカルは想像以上に社会への大きな影響力を備えているんです」

中国通俗文学は『三国志』『西遊記』『水滸伝』などが日本で有名だが、その作品の数は限りない。

「もともと中国の娯楽はお芝居や講談といった一回性のパフォーマンスが出発点で、そういった芸能が宋の時代に一気に花開くんです。そこから何百年もかけてさまざまな物語が蓄積されていき、明の時代の1500年代に出版業が盛んになると、文字として残されるようになりました。ですから、『水滸伝』なども最初から整合性の取れた一つの物語だったのではなく、口頭芸能で演じられてきたさまざまな短い話を寄せ集め、再編集したものなのですね」

口頭芸能は客の反応を見ながら台本を変えていく。それは、現代のサブカルである少年ジャンプやNetflixが読者や視聴者の反応を見ながらストーリーを変えていくようなものだと松浦は言う。それゆえに、通俗文学からは当時の民衆がどんな話を望んでいたのかが見えてくる。

サブカルの裏にあるマグマのような何か

「翻訳に携わった『楊家将演義』は北宋の武将のお話です。私は恋愛ものより、やるかやられるかのチャンバラが好きなんですが（笑）、明の時代の人は宋の時代をサブカルでよく取り上げます。それは漢族としてのアイデンティティと結びついているのかもしれません。自分たちは宋の時代と同じ民族的な正当性を持っているんだと明の時代の人は感じていたのではないか。もともと、“民族”の概念があまりなかった中国ですが、明の後半のこの時期、ナショナリズムに似たものが生まれていったのかもしれない。そういう社会的意識の表出を読み取ることもできるんです」

明の時代には北方から女真が攻め入ってきたが、宋の時代にも北方からの女真やモンゴ

ルの侵攻という同じような出来事があった。宋の武人が敵を蹴散らすという英雄譚が好まれ、芝居や講談などでたくさん演じられたのは、異民族から攻められた明の社会の動きと連動しているのだとも言う。

「質のいい娯楽は大衆を動かすには一番便利な道具ですから、サブカルはプロパガンダにも使われたりしたと思います」

その影響は日本の幕末の志士たちにも見ることができるという。

「明の時代のサブカルに多く取り上げられた武将の岳飛は、吉田松陰や西郷隆盛、橋本左内といった人たちに愛国の志士のシンボルとして扱われていました。オレたちもああいう武将のように死ぬんだと」

そんな松浦の視点を社会学的だと評する人もいる。

「中高のときから社会の授業が大好きでしたし、社会学的なことにはもともと興味がありました。文学で言えば、作品を鑑賞することよりも、なぜその作品が出てきたのかというほうに興味がわくんです。どの文明でも文字を使えるのは支配階級の男性でした。一方、文字を使えないのは女性や庶民。そんな声なき人の声をどうしたら拾えるだろうか。それがサブカルに引かれる理由なんです」

つまりサブカルの「文字」には、その「文字」を使えなかった人々の欲望や情念や希望や夢が、つまり「生」そのものが刻印されているということなのだ。

「知識階級の人々が創り、好んだ文学作品も大事ですが、個人的には物足りなさを覚えます。時代の裏側にはマグマのようなもの、人々の圧倒的なエネルギーが存在したはずです。ところが、そこがあまり研究されてこなかった。でも、聞こえにくい声ではあるけれど、丹念に拾い続ければ、いつかきっとはっきり見えてくるんじゃないかと思うんです」

明代の宮廷で読まれたマンガ

中国国内の石碑の調査も松浦の大事な研究の一つだ。

「中国のお墓の石碑には家系図が描かれています。その中には、我が家は英雄的な武将の末裔だとする、いわば嘘の家系図が含まれていることがあります。オレはあの英雄の子孫だぞと、通俗文学に出てくる家系図をそのまま自分の家の家系図にしたりするんですね。コミカルですが、昔は文芸と現実の境界線はあいまいでしたし、先祖が強い武将なら守ってもらえるという、力の信仰のようなものがあったのだと思います」

感動をもたらす物語は人々の自己を支えるモチベーションになると松浦は言う。

「“ものがたり”という心や感情を揺さぶるものに人は頼ってきたのだと思います。危機の際に人は何にすがるのか。どうすれば自分のアイデンティティを満足させられる自己を確立できるのか。そんな視点から、当時の社会の中に入り込み、人々にどういう影響をサブカルは与えていたのかを知りたいのですね」

これから力を入れたいのは「視覚文芸」だという。絵入りの出版物のことで、いわばマンガである。明の時代、宮廷の中で多く読まれ、政治に少なからぬ影響を与えたのではという。

「『キングダム』じゃないですけど、中身もフルカラーで超サブカルなんですが、宮廷内の宦官や女性、子どもたち、中・下級の識字層に主に読まれていました。先ほど挙げた岳飛の“マンガ”などもたくさんあります。どんな意図で作られたのか、宮廷の人たちにどんな影響を与えていたのかを調べるのが今後のテーマです」

そもそも松浦が中国文学の道に進んだのは中国文学の研究者だった父の影響があった。

「10歳ぐらいの頃に、北京大学に赴任していた父を訪ねて中国に家族と行ったことがあります。数週間程度の滞在で、中国各地もまわりましたが、街の電灯はうす暗くて、時間もゆったり、みんなのんびり、牧歌的な時代でした。私の原体験の一つです。ちなみに父の専門は李白などの中国古典文学でした。サブカルとは対極です」

そう言って松浦はおかしそうに表情をゆるめた。

影絵芝居で使用される人形。今で言うならカラーのアニメみたいなものとして楽しまれた。これは『三国志』の「桃園の誓い」の場面。

初めて翻訳を手がけた『楊家将演義』（勉誠出版）。北宋の名将、楊業の悲劇的生涯を描いた、明代に出版された作品。

FEATURE

植物は「人間とは何か」を教えてくれる

もしかすると動物以上に不可思議で
未解明のままなのが植物かもしれない。
そんなフロンティアに挑むことで
植物学者は人間の謎への答えを探す。

西谷 和彦 教授

理学部 生物科学科

植物生理学、植物細胞壁生物学

陸上植物の本質は細胞壁にあり

考えれば考えるほど、植物とは摩訶不思議な生命体だ。脳も神経も心臓もない。だのに意志があるかの如くに、発芽し、成長し、時が満てば精妙で美しい花を咲かせ、子孫を残す。西谷が言う。

「5億年前に、淡水域に生息していた単細胞の藻類が陸に上がり、多細胞体に進化したのが植物だと考えられていますが、植物は生命体を維持する仕組みとして、動物のような中枢神経系は持たない方向に進みました。それなのに、朝顔の蔓は支柱の存在を察知してくるくると巻き付きながら伸びていく。あるいは、森の中の林床に生える植物は、周りの菌に感染しませんが、一度死んでしまえば一晩で植物の遺骸はカビだらけになる。あたかも神経系や免疫系があるかのように生きている。この苛酷な地上で生きるために何億年もかけて身に付けてきたこの植物の仕組みの、実はその多くがいまだに未解明なままなのです。言いかえれば、それこそが植物研究の基盤であり、醍醐味なのですね」

そして半ば冗談に、植物は人間を見下しているかもしれないと、こう言う。

「今、その植物が陸上を席巻しています。地球上の生物を構成している物質量――バイオマス（生物量）の大部分は植物です。われわれ人間は万物の霊長と自認していますが、もしも宇宙人が望遠鏡で地球を観察したら、ほとんどが植物で、ときどき人間がゴミみたいに見えるだけですから、地球の主は植物だと思うでしょう。なにしろ、地球上で一番大きい生物は、地上部だけでも100メートルを超える高さに繁る裸子植物です。シロナガスクジラなどくらべものになりません。そういう意味では、我々はずっと植物に見下されているのかもしれませんね」

自分たちの高度な仕組みが人間ごときに分かるものではないと言われているようだと西谷は語るが、だからこそ西谷の探求もやまない。

「水分や養分を運ぶ維管束が、信号情報を運ぶ通路にもなっていることはよく知られていますが、これだけでは環境に反応する植物の情報能力をうまく説明できないのです。そこで注目されるのが植物の全ての細胞にある細胞壁そのものの働きです。植物が陸に上がって進化する過程で新たに獲得した最も重要な機能が陸上の植物に固有の細胞壁です。海洋の藻類と陸上植物の決定的な違いはこの細胞壁の働きであり、その構造、つまり細胞壁をつくっている特徴的な分子であるセルロースとその周りの多糖類なんですね」

植物は、動物の中枢神経にあたるものとして、個々の独立した細胞が外部の環境を察知して応答していく、分散型制御というシステムを持っているのだという。

「神経系に対応するものが細胞壁の持つさまざまな探知機構です。動物の筋肉や骨格、感覚器や内分泌、免疫系などの器官に対応する機能も、すべて細胞壁が担っている。その細胞壁の働きや構造、言いかえればセルロースなどがどういう役割を果たしているかはまだ

Kazuhiko Nishitani

1976年、大阪市立大学理学部卒業。1981年、大阪市立大学大学院博士課程修了。1984年、鹿児島大学農学部助教授。1997年、東北大学大学院理学研究科教授。2001年、東北大学大学院生命化学研究科教授。2020年、神奈川大学理学部教授。2020年より日本科学振興機構さきがけ研究領域「植物分子」研究総括。

よくわかっていません。そのセルロースがどんな分子構造をしているかというのも実はまだ未解明な部分が多いんです」

人体で言えば神経があり、血液があり、免疫細胞がある、その全体をたった一個の細胞壁が担う。その細胞壁を最新の電子顕微鏡で見ると、内部は実に複雑きわまりないのだと西谷は言う。だが、その複雑さの背後にはセルロースを中心とした細胞壁を構成する多数の分子の深遠きわまりない秩序があるはずだ。

「90%の植物からなる生命圏。この世界を植物が作るに至ったその秘密が、細胞壁がどのようにしてできてきたかを、あるいは細胞壁のいろいろな仕組みを明らかにできれば、知ることができるのではないだろうか。そういう視点で見れば、一見なんの変哲もない植物なんかをなぜわれわれが研究しているのか、その意味がわかってもらえると思います」

はからずも持続可能な新素材が

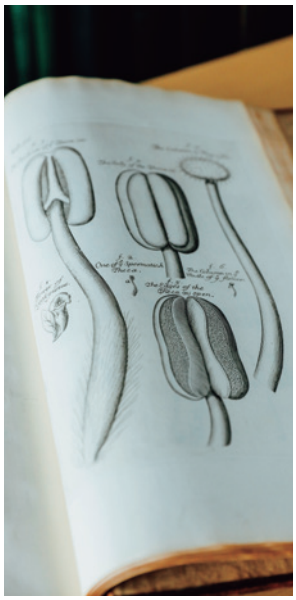
2019年、西谷は植物科学の分野で大変名誉のある日本植物学会賞「学術賞」を受賞した。この細胞壁への研究、特にセルロースに接着するキシログルカンという分子を切ったり繋いだりを可能にする酵素である「XTH」と、セルロースそのものに作用する「CET」の発見が大きく評価された。

「セルロースが主成分である細胞壁の形が変わる仕組みを探求していくと、たんぱく質や酵素の働きでセルロースとセルロースとの間の相互作用のしかたが変わり、小さな力でシュッと伸びることがわかりました。ブドウ糖なのにスチールのように硬いのがセルロースです。それは植物が持っている酵素でしか分解できない。ですから人為的にセルロース微繊維を切って繋ぐことはできないと考えられていました。それが酵素の仲間の中にそういう働きを持ったものがあるのを、わたしたちが見つけました。その酵素を使って人間がセルロースを繋ぎ替えたりすることができる可能性が出てきたわけです」

これがいかに大きなインパクトを持つ研究であるか。現在、断面積あたりの破断強度がもっとも大きいのは炭素繊維や鋼鉄とされているが、実はそれよりもセルロースのほうがずっと強度がある。つまり、セルロースを自在に加工できれば、さまざまな場面で持続可能であるこのセルロースを素材として使えるようになるわけである。

「植物という何の役にも立たないような研究をやっていると、こういうことが起こるんですね。これが基礎科学の本来の姿なのでしょうか」と西谷は笑う。

小学校のときに父親が買ってくれた顕微鏡をいまでも大事に持っている。病原菌が見たかったのだというが、もちろん、実際はプランクトンばかりを見ていた。



これはイギリスの古書店で入手した、17世紀に出版された貴重な植物学書『THE ANATOMY OF PLANTS WITH AN IDEA OF A Philosophical History of Plants』。

植物に寄生する植物の不思議

なぜだか、子どもの頃から科学者になりたいと思っていたという。小学校の時に父親が買ってくれた顕微鏡で、毎日、近所の溜め池で採取したプランクトンを観察していた。すると中学では理科の先生が『日本淡水プランクトン図鑑』を教えてくれた。これが西谷が生物学へと向かう道を決定づけた。

「大学生の頃からわたしは理学としての植物学を研究しているわけですが、それはなぜなのか。最終目的は自分自身なんです。自分とは何か？　あるいは自分も含めた人類とは何か？　はたまた、精神を持ち、ものを考えている生命とは何か？　そういう本質的なことに、わたしは興味があるのですね。それなら、動物を研究すればいいと思うかもしれませんが、わたしは植物なのです。人間ともっとも対極にある植物を調べることが、実はわれわれ自身をもっともよく観ることができる方法なのではないかと思うんです」

今後の研究テーマとして、植物に寄生する植物のネナシカズラに強く惹かれるという。

「植物が植物に寄生するという、奇想天外な植物がネナシカズラです。植物は自分で光合成をして初めて植物なのですが、ネナシカズラは光合成をしません。また、大地に根をつけて初めて植物なのに、自分でわざわざ根を退化させたんです。発芽した直後に他の植物の上にかぶさって寄生し、光合成を行っている宿主から“甘い汁”を吸うように進化したのです。わたしの予測では、恐らくこの植物は1千万年後ぐらいには、風に吹かれて空を滑空しながら、宿主から宿主をわたりあるく植物になるんではないかと思います」

まさに、考えれば考えるほど、植物とは摩訶不思議な生命体である。

FEATURE

制御がモノをオブジェから生きものに変える

宇宙エレベーターのクライマーから手を使わずにコントロールできる車椅子まで多くの独創的な研究開発が続く研究室。
その主の夢は発明品が世の役に立つことだという。

江上 正 教授

工学部 機械工学科

知能機械学・
制御システム、
航空宇宙工学

宇宙エレベーター競技への挑戦

宇宙エレベーターとは文字通り、地上から宇宙に行くためにロケットの代わりにエレベーターを使うこと。約3万6000km上空の静止衛星から垂らしたテザーと呼ばれる特殊なロープを伝い、クライマー（自走式の昇降機）で昇り降りするというものだ。SFの話ではない。世界中で真剣に研究が行われているテーマなのだ。この宇宙エレベーターのクライマーの競技会がある。もちろん、宇宙までは無理である。数百メートルから1.2キロほどの高さに浮かべた気球から垂らしたテザーを、小型の無人クライマーが昇降する、そのスピードなどを競うのである。実は江上の率いる神大チームは、この競技で優勝経験もある強豪なのだ。

「富士山麓などの野外で競技会や記録会は行われますから、学生たちと合宿生活のようになるんですね。一緒にお風呂に入ったり、飲み会をしたり。準備が間に合わず、学生たちはときに徹夜もする。その過程で深い交流が生まれるんです。いいもんだなあと思いますね」と江上は振り返る。

クライマーはウレタンをかぶせた金属製のローラーでテザーを挟み、ローラーを回転させて昇降する。このローラーの形状をキャタピラ状（クローラという）に変えてみたり、ローラーの数を変えて2輪や4輪や6輪にしてみたり、あるいはウレタンではない素材に変えてみたりとさまざまに試行錯誤を繰り返す。また、空中にあるテザーは風の影響を受けて大きく揺れ動き、それとともに激しく変化するクライマーの姿勢の制御も重要となる。という具合に、単なる昇降ではあるが、非常に多様で困難な課題がつきまとう。

「わたしたちは制御の研究室なので、制御的なものでアピールしたいと常に考えていました。たとえば、テザーが湿るとローラーが滑ってしまいます。だからといって押しつけ圧を高めると、エネルギーロスが大きくなる。そのため、ローラーの押しつけ圧を自動調整する方法を考えましたし、また、空中で回転しないように姿勢制御のためのジャイロユニットの開発などもしました」

それ以外にも数多くの新しい技術がクライマーには詰め込まれている。高さがわずか1メートルほどのクライマーだが、それはいわば機械工学の粋といっても過言ではない。

実用化を目指す数々のプロジェクト

宇宙エレベーターの実用化はNASAやJAXAといった大きな組織が国家的に取り組まなければ実現はないと江上は言う。その点では、いまだ夢物語にすぎない。だが、このクライマーに注がれた熱情は、社会に役立つマシンとして生まれ変わろうとしている。そして、そんな「実用化」こそが機械工学の醍醐味であり、江上がもっとも喜びとするところだという。

「このクライマーの技術を発展させて、いま、

Tadashi Egami

1982年、北海道大学工学部 電気工学科卒業。1987年、北海道大学大学院工学研究科電気工学専攻博士課程修了。1999年、神奈川大学大学院工学研究科機械工学専攻博士後期課程教授。

鉄塔に自力で登っていくことができる工事支援ロボットの開発をしているんです。高圧電線を支える高い送電塔に人間が昇って作業をするのは大きな危険が伴います。ロボットが代わりに行うことができれば、作業員の安全につながります。これはすでに実験においてもスムーズに鉄塔を昇ることに成功していますから、実用化も近いでしょう」

クライマーで培われた技術は、他にも壁面検査ロボットや、高所にモノを運搬するロボットなど、さまざまに実用化がなされようとしている。

江上が開発を進めているのはクライマーだけではない。たとえば、体の動きでコントロールする電動車イスもそうである。

「セグウェイはご存じだと思いますが、あのように、体を左右に動かすことで車椅子の動く方向をコントロールするんです。それだと、手を使わずに自由にどこにでも車椅子で出かけることができる。すでに展示会に出品していますが、慣れるとまるで自転車のイメージで運転できます」

あるいはまた、アイリスロボットハンドだ。これはカメラの絞り羽根（これをアイリス機構という）に似た形状のもので、モノを包み込むようにして持つことができる。精密な位置決めが不要であり、安価な製造・運用もできる。

「人間型のロボットハンドをずっと研究していたのですが、複雑になればなるほどモーターの数が増え、故障も多くなるという欠点がありました。そこで発想をまるっきり変えて、アイリス機構を利用してモノを把持するロボットハンドを考え出しました。これだとモーターが一つで済みますし、大きなものから小さなネジ1本まで自在に持つことができる。これも、わたしたちの研究室のオリジナルなんです」

江上は「オリジナル」という言葉に力を入れた。

独創性こそが大事

「世の中に無いようなもの、独創性が何よりも大事だと思っているんです。クライマーも高度な制御系を積んでおり、その点でとてもオリジナリティにあふれています。電動車イスにしても、アイリスロボットハンドにしても、研究中の他のプロジェクトにしてもそうです」と江上は言う。

小さな頃から、将来は発明家になりたいなと思っていたという。大学院までは制御理論が専門だったが、やがて機械工学科に勤務することになり、そこでメカの面白さに惹きつけられた。

「最初はかんたんなモーターの回転制御だったのですが、シミュレーションしたとおりの目標値に追従して回転したときにはものすごく感動しました。まるで神になった気持ちでしたよ」と江上は笑う。

モノにシステムを組み込み、それが思い通りに動いた時の楽しさ、喜び。言いかえれば、制御によってモノは単なるオブジェから生きたマシンとなることへの感動。それが江上をとりこにした。

「関心はロボットに向いていきました。そして、どうせやるなら、人間にできないことをする、人間を超えたロボットをつくりたいと思うようになったんですね」

学生たちに願うことは、やはり独創性だという。最初はものまねでもいい。だが、それを出発点として、自分のアイデアをプラスして新しいものを生み出していって欲しいという。

江上に夢は何かと聞いたところ、こんな答が返ってきた。

「どんなに小さなものでもいいので、自分が開発したものが世の中に出て、世の中の役に立っているところを見ることですね」

カメラの絞り羽根の機構からヒントを得たアイリスロボットハンド。

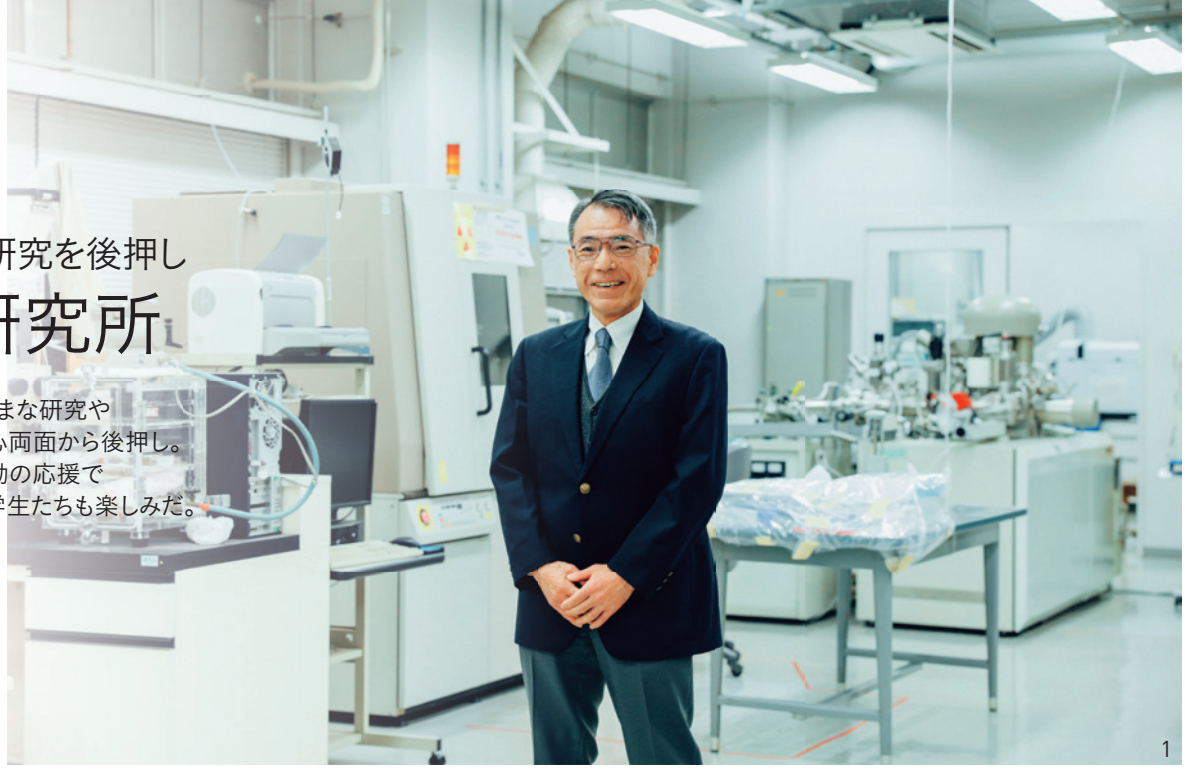
宇宙エレベーターのクライマー。数多くの形式のうちの一つ。

LABS

世界へ届く研究を後押し

工学研究所

工学分野のさまざまな研究や
プロジェクトを物心両面から後押し。
テクノサークル活動の応援で
より高く羽ばたく学生たちも楽しみだ。



1

2

1 精密測定室を案内する工学研究所所長の今井崇雅教授（工学部情報システム創成学科）。2 精密測定室のX線光電子分光装置。試料にX線を照射し、表面から発生する光電子を測定することにより、化学結合状態などを分析できる。

研究所が毎年刊行している『神奈川大学工学研究』では、共同研究やプロジェクト研究の成果や進捗状況、さまざまなトピックスを紹介している。

工学の発展に寄与する研究調査の推進、それを環境や資金面でサポートするのが工学研究所の大きな役割だ。今井崇雅所長が語る。

「共同研究、およびプロジェクト研究というものが中心的な取り組みの一つです。共同研究では、多くの分野の研究者の知恵を結集した萌芽的な研究や、もう一押しで社会に役立つ新技術創出に寄与するような研究を資金面も含め、後押ししています。プロジェクト研究では、外部の研究者なども幅広く参加いただける客員研究員などのしくみを活用することで、さらなる成果を出しています。現在、6つの共同研究と20のプロジェクト研究が進行中です」

研究所内の精密測定室に並ぶ各種の電子顕微鏡など多くの大型分析装置は、この共同研究やプロジェクト研究だけでなく、大学の研究者や学生たちの卒論や修論の研究にも使われる。

「高額な装置を多くの研究者が共有しつつ、特殊なノウハウが必要な装置のメンテナンスを熟練の職員が行うことで、多くの研究者が高度な研究に専念できます」

産学官連携を育む『テクノフェスタ』などのイベント、地域の皆様に向けた公開講座『暮らしの中のサイエンス』を毎年開催。また、テクノサークルというユニークな活動も運営している。

「学生たちが自ら工夫することや、もの作りへの挑戦の楽しさを実感できる活動を支援しているのがテクノサークルです。電気自動車やロボットなど、テーマ別に5つのテクノサークルがあります。研究開発はたいへんだけど、ほかでは味わえない楽しさがそこにあるからこそ続けられる。そんなことを感じ取ってもらえれば成功だと思っています」

工学研究所のサポートがこれまで『PROUD BLUE』に紹介されたものをはじめとした多くの輝かしい成果を生み出していることが、なによりも「誇らしい」と今井所長は語った。

この走査型電子顕微鏡では、試料の表面形状を、照射電圧1.0kVで1.3nmの高分解能（約30万倍）での観察が可能になるという。付属のエネルギー分散型X線分析装置により、画像の観察と同時に元素分析も可能。

A NEW HOPE

注目の若手研究者

小野寺 佑紀

歴史民俗資料学研究科
博士後期課程３年

弱者に寄り添う民俗学を

津波で破壊された故郷が
彼を研究者への道へと駆り立てた。
民俗学で人の役に立ちたいと
自らも被災者の彼はいう。

2011年３月11日、宮城県気仙沼市大島の小野寺の実家は地震で倒壊し、襲った津波は親類や友人たちの命を奪っていった。その日、美術大学の学生だった小野寺は仙台市にいて無事だったが、この大震災が彼を民俗学研究への道へと向かわせることとなる。

「津波で地元のお地蔵様が流出して無くなり、彫刻の勉強をしていたわたしが400年ぶりにかわりの仏像を彫ることになりました。完成した仏像を車に乗せて仮設住宅を回っているうちに、お爺さん、お婆さんから津波に関するいろいろな伝承を聞かされました。津波に翻弄されてきた町ですので、伝承を集めないとだめだとそのとき思ったんです」

卒業後、地元に戻って美術の教師として中学校に勤めた小野寺は、勤務後に多くの方から津波の話を聞いて記録に残すという作業を始めた。このとき出会ったのが、神奈川大学の日本常民文化研究所が現地で行っていた、漁協に保管されていた海水まみれの古文書の「救出活動」だった。もともと民俗学に関心があった小野寺は、この活動を手伝う中で、研究者となることを心に決める。

「決め手の一つは、漁業制度資料のメッカが常民研だということでした。現在は、博士課程で海難者供養の民俗学的研究に取り組んでいます。海難者は豊漁を与えてくれ、自然の災禍を防いでくれる存在と漁民は認識していたのではないかという仮説から、各地の習俗を調べています。日本人はどういうふうに死者と向き合ってきたのか、海と向き合ってきたのか。それがわたしの大きなテーマですね」

遺族をはじめとした社会的な弱者に寄り添った、血の通った研究を心掛けたいと小野寺は言う。

「人の役に立たなければ意味が無いと思っています。そのためにも、記録を残すということが重要ですし、人にしっかり向き合った調査をしていきたいと思っています」

Yuki Onodera

1990年、宮城県気仙沼市生まれ。2013年、東北生活文化大学卒業後、中学校教師に。2016年、神奈川大学歴史民俗資料学研究科博士課程入学。

INTERVIEW :
HISTORY INSIGHTS

ラテンアメリカから世界を見る

地球を北からではなく、南から見ると
世界はまったく違って見えると、
ラテンアメリカ現代史の第一人者の後藤は言う。
そこにはコロナ後の世界の姿も見られると。

後藤 政子
名誉教授
ラテンアメリカ現代史

Masako Goto

1941年生まれ。東京外国語大学スペイン語学科卒業。1996年、神奈川大学外国語学部助教授。2002年、神奈川大学外国語学部教授。2012年、神奈川大学名誉教授。

ラテンアメリカの今と日本の未来

「ラテンアメリカ諸国を単なる発展途上国とみなすと間違いを犯すかもしれません。先進的な面も数多くあります。一般市民が新しい社会への原動力になっていることもそうです」

持続可能な社会とはどのようなものか、ポスト資本主義の世界はいかにあるべきか、その一つの答えがそこにあると後藤は言う。たとえばコロナ問題だ。ブラジルでは地方政府や市民組織などが「単なる風邪だ」と豪語するボルソナロ大統領に圧力をかけ、さまざまな対策を実施させた。大統領にマスクをするよう裁判所に命令させたのも市民の力だった。コロナ情報の開示すらしないチリのピニェラ政権も、女性たちが「命のストライキ」を呼びかけると、何十万もの市民が加わり、連日、大規模なデモが全国で繰り広げられ、政策を変えざるをえなくなった。デモは新自由主義体制の転換を求める運動にもつながっている。

「1%の富裕層ではなく99%の普通の人々のための社会、多様な人々が共存する社会、持続可能な発展を目指して奮闘している国々もあります。中でも注目したいのはキューバです。21世紀にふさわしい新しい社会のあり方を求めて必死に試行錯誤を続けているんですね」

後藤がラテンアメリカに興味を持ち始めたのは、大学でスペイン語を学んでいた1960年代はじめのころ。

「当時、ラテンアメリカの学術研究は考古学や植民地時代が中心でした。そこでラテンアメリカ現代史の勉強を始めました。『米国の裏庭』と言われるラテンアメリカでは、独立以来、さまざまな自立の試みがなされてきましたが、ことごとく挫折してきました」

ところが1959年にキューバ革命が成功すると、「ラテンアメリカ史の転換期」と言われる大きな変動期を迎える。キューバは武力侵攻を初めとする米国のあらゆる干渉に耐え、革命の基本理念を守ってきた。「米国の事実上植民地」と言われた小国でなぜそれができたのだろう。いったいキューバ革命とは何だったのか。ラテンアメリカへの影響は？　そんな問題意識のもとに研究を進め、書き上げたのが著書『現代のラテンアメリカ』だった。

「キューバは社会主義を掲げていますが、共産党の一党支配、独裁といった世間の常識とはまったく異なる社会主義で、『社会正義主義』と言ったほうがよいかもしれません」

革命後には貧困層の生活向上、人種差別の

撤廃、女性の解放を進めた。対話民主主義を行い、前衛芸術も花開いた。カストロは革命が成功してハバナに入城するとすぐさま、世界的バレリーナのアリシア・アロンソに、「これからは国民のだれもがバレエや芸術を楽しめるようにしたい」と協力を依頼したと言う。キューバ革命が目指すのは、底辺層の人々も含め「すべての人々」が経済的にも、また文化的にも豊かに暮らす社会なのである。

知の力と草の根民主主義

キューバは社会主義国になったあと、ソ連や中国とは異なる独自の「平等主義体制」をとった。やがて、それは壁に突き当たり、1970年代半ばにソ連型の政治経済体制に転換した。このとき、カストロはソ連風の上意下達の政治体制の導入には強く反対した。参加民主主義という革命の理念とは相容れないからだ。カストロの意向は通らなかったが、すぐさま、「キューバ革命らしくない社会だ」という市民の声が上がり、80年代初頭には体制の改革に動きだしている。

「キューバの国造りのベースになっているのは知の力と草の根民主主義なのです。『キューバ独立の父』と言われるホセ・マルティという人がいます。19世紀の独立運動指導者で、カストロだけでなく、キューバの人々みなが尊敬しているのですが、思想的にはルソーなどの啓蒙主義の影響を受けています。マルティは『表層の陰に隠れた真実を見極める目を持つこと、それが教育だ』と言っています」

この理念に沿って、たとえば学校では先生が教科書で教えるのではなく、生徒自身が図書館で調べたり、教室で議論しながら知識を深めるという方法がとられている。革命前には4人に一人が非識字者だったが、革命後、教育の発展に力が注がれて高学歴社会となり、厚い知識人層が形成された。こうした人々が研究調査を通じて社会が抱える問題を掘り起こし、政府に政策を提言しているのだ。

「キューバの人たちは『僕らはポリティカル・アニマルなんだ。政治のことも自由に意見を言い合うよ』と言うんです。みな、本当に議論好きなのですね」

実際、共産党規約にも『異見の存在を当然とみなし、尊重する』と規定されている。議会制度も、職場や学校などさまざまな草の根組織での議論が地区議会から国会へと積み上げられていく仕組みだ。コロナ対策でも、地域に密着した医療制度に加え、専門家の知見の結集や住民の政策決定への参加によって感染拡大を抑制し、世界のお手本となった。

一方、1990年代から部分的経済自由化が進み、複雑で難しい問題も出ている。

「一つは貧困層に黒人が増え、人種差別が少しずつ頭をもたげつつあること。もう一つは、高学歴の女性が管理職や研究者などとして活躍する一方で、一般女性は単純労働という『女性の分化』が見られ始めること。制度的には完全に平等なのですが、政府の必死な努力が及ばないところで目に見えない市場の力が働いたり、これまで心の奥に封じ込められていた差別意識が表に出始めているのです」

2019年、キューバは新憲法を制定した。

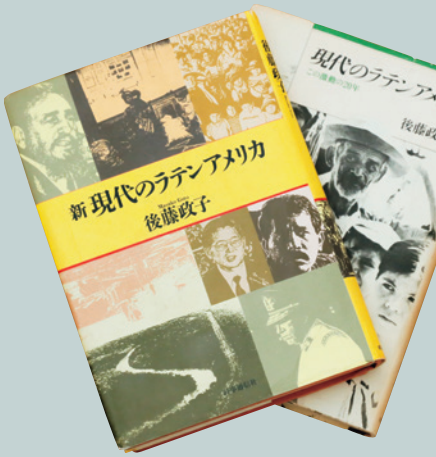
「まさに21世紀にふさわしい憲法だと思っています。すべての人々の自由や平等を基本理念に、政治的信条や報道の自由などのほか、国民が政府に情報開示を求める権利、それに政府が的確に答える義務も規定されています。女性の平等については特に条項が設けられています。新憲法は革命から60年、紆余曲折の末にようやくたどり着いた一つの着地点と思います。憲法に謳われている理念をいかにして実現していくのか、難しさをひしひしと感じますが、しっかり見つめていきたいですね」

さて後藤は、学生自身が教材用ビデオを作製するという企画で神奈川大学の学生と、何度かラテンアメリカ諸国を訪れている。

「コスタリカでは平和憲法を守ったことで知られるモンヘ元大統領にもインタビューをしたのですが、学生たちがとても礼儀正しく熱心なことに大統領が感激して2度もお手紙を下さいました。作製したビデオの上映会も開かれたそうです」

後藤は少しでも多くの学生にラテンアメリカについて学んで欲しいと願う。

「地球を北ではなく、南から見ると、まったく違った世界が見えてきます。ラテンアメリカは日本の未来について考えるためのよい鏡になるかもしれません」



後藤の最初の著作『現代のラテンアメリカ』と『新現代のラテンアメリカ』

カストロの墓。ただ「フィデル」とだけ書かれている簡素な墓碑だ。背後に見えるのはホセ・マルティ廟。

TREASURE #4

アチック写真

日本常民文化研究所を創設した渋沢敬三が
仲間たちとともに撮影、記録した写真群。
そこには100年前の東アジアの庶民の暮らしが
生き生きと映し出されていた。

神奈川大学の日本常民文化研究所の原点は、渋沢栄一の孫である渋沢敬三が大正時代に設立したアチック・ミューゼアムに遡る。アチックとは屋根裏部屋のこと。つまり、「屋根裏博物館」である。日本銀行総裁や大蔵大臣も務めた渋沢敬三は実は生物学者となることを熱望していた青年だった。その夢が諦めきれなかったかのように、30代を迎えた頃、彼は私財を投じ、仲間たちとともにさまざまな民具などを収集・研究するために、文字通り、渋沢家の大豪邸の屋根裏部屋につくったのがアチック・ミューゼアムなのである。とはいえお金持ちの道楽などではなく、専従研究員も雇い、当時としてはきわめて先進的かつ学術的な方法を取り入れていた。やがてこのアチック・ミューゼアムは日本常民文化研究所と改称され、現在へと至るのである。

今号で紹介するトレジャーは、そのアチック・ミューゼアムに残されていた膨大な数の写真コレクションである。渋沢敬三と仲間たちが日本国内だけでなく、朝鮮半島や台湾に赴き、庶民の生活の様子を、当時は希少かつ最新鋭の機械であったカメラで撮影・記録したものだ。写真はアルバムに貼られていたり、バラバラの状態のものなど、その数は8000枚に及ぶ。研究所は10年前から整理保存の作業を始め、書誌データも完成、いまではデジタルデータとしても保存され、誰でも見ることができるようになっている。研究所では撮影された現地に学術的に還元することが大切と考え、韓国や台湾などの撮影地で写真の上映会などを開催し、地元のお年寄りが自分が映っている写真に出会うなど、大きな反響を呼んだ。写真史的にも貴重なコレクションであり、研究所は多くの人に知ってほしいと願っている。

PROUD BLUE
編集発行／神奈川大学研究支援部、広報部　CD／黒澤加奈子（図書印刷）　AD／畑山田光宣（畑山田デザイン）　D／川口匠（畑山田デザイン）　TEXT／太田穣　PH／岡村隆広　PD／山宮伸之、長濱紀子（図書印刷）
問い合わせ先　045-481-5661（代）　proud-blue@kanagawa-u.ac.jp

VEGETABLE OIL INK